

脳システム論と「知・情・意」

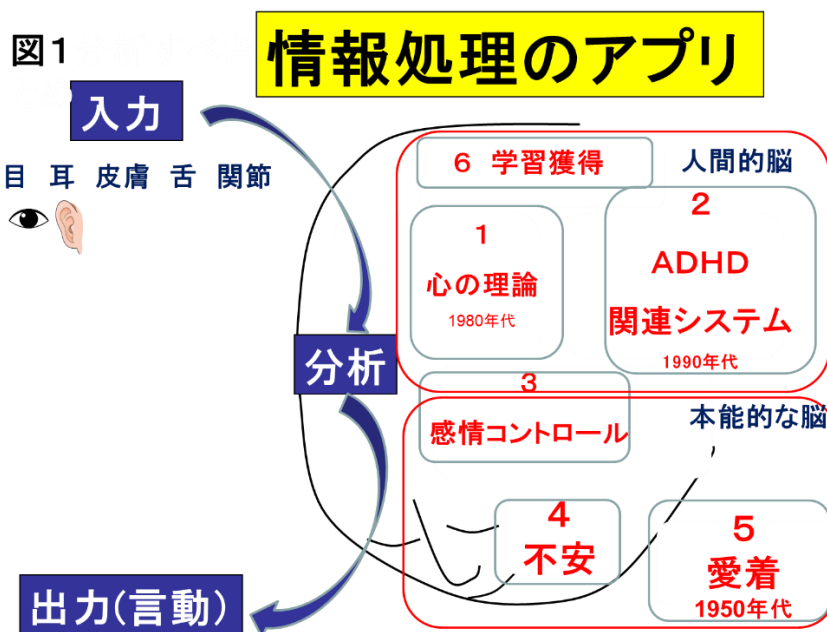
発達クリニックぱすてる
院長 東條 恵
2021年3月27日

人は「知・情・意」で生きている、と表現されます。夏目漱石は興味深い表現をしています。

「山路（やまみち）を登りながら、こう考えた。知に働けば角が立つ。情に棹（さお）させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。（草枕）」

さて脳システム論では「知・情・意」はどのように位置づけられるのでしょうか。これまで考えてこなかった点であり、自分の中で不明確でした。最近やっと、こうなのかと思うようになりました。この点について述べます。

脳システム論は問題の分析と個別支援計画を立てる上で役立ちます。でも人間が生きている存在であるという感覚を持ってない内容であり、脳システム論をまとめた自分として違和感を持っていました。その状況に追加修正する事が今回の目的です。脳システム論に血を通わせるイメージです。



これは、脳システム論で言及している、6つの脳内アプリの図です。3, 4, 5は反射的に

動く「現実の世界」対応の分野です。1, 2, 6は、メタ認知などを利用したりしての「想像性の世界」、「ファンタジーの世界」と言えます。後者は、人間を人間たらしめている部分だと思います。

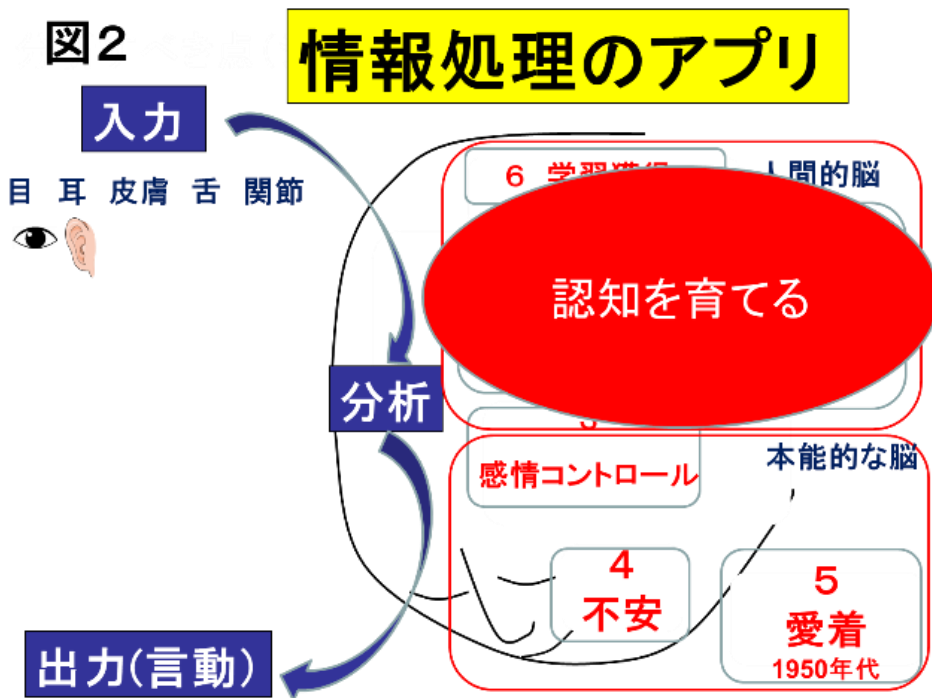


図2のごとく、アプリ1, 2は「認知」を育てています。知・情・意の「知」の部分です。

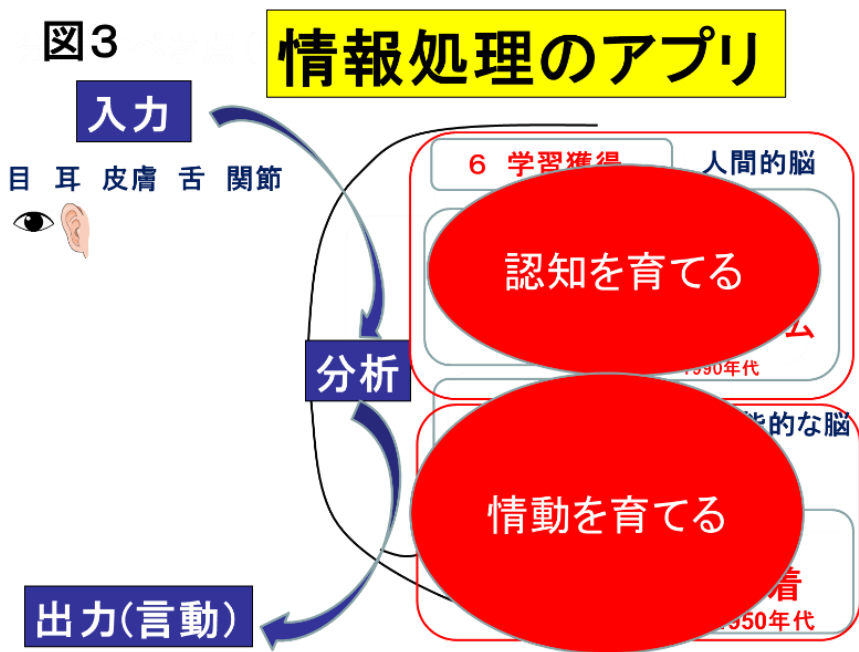


図3のごとく、3, 4, 5は「情動」を育てます。知・情・意の「情」の部分です。

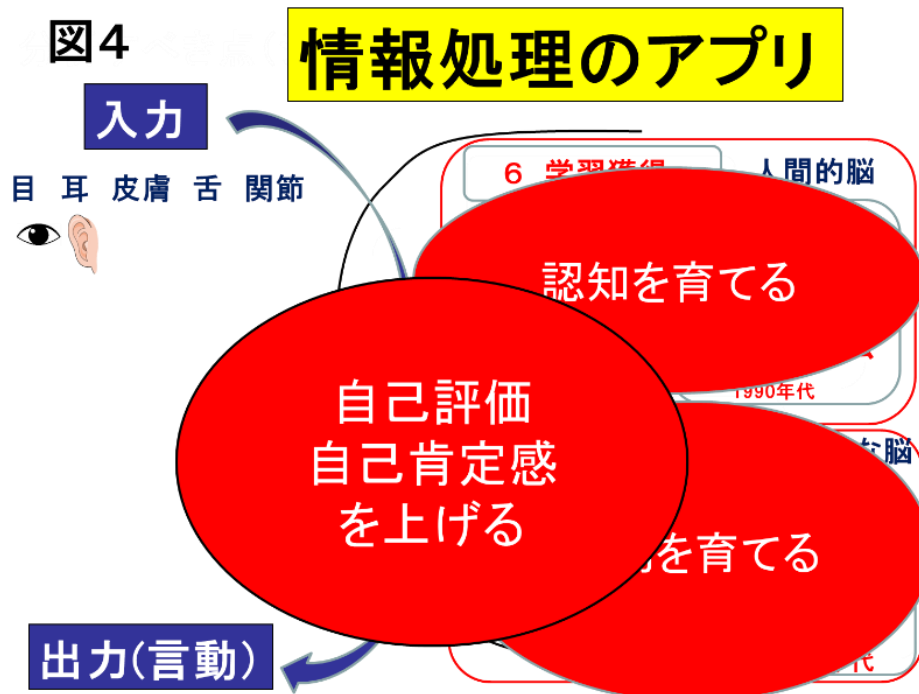
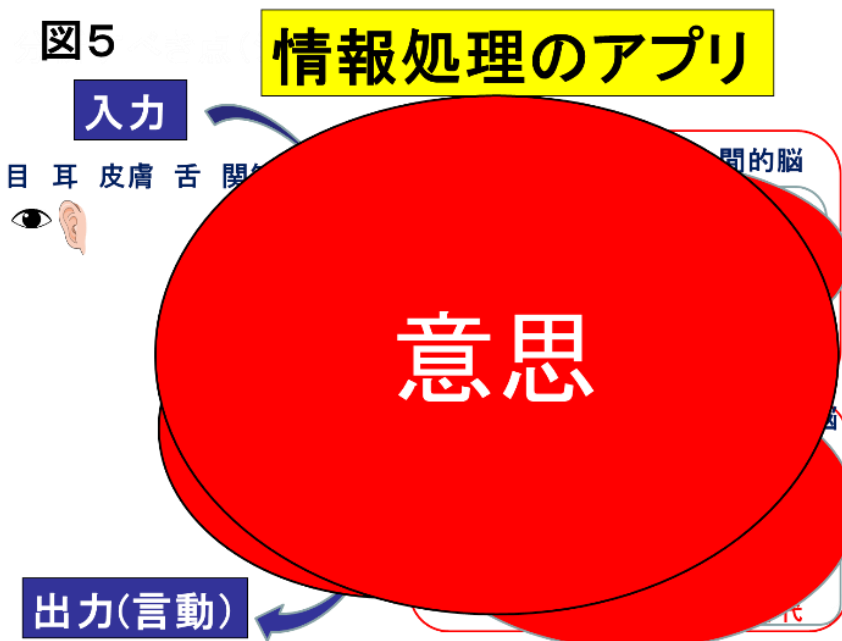


図4、5のごとく、これらを基礎として、自分という意識が生まれ、人としての活動を行うのでしょうか。知・情・意の「意」=意思の部分です。自己肯定感、自己評価、自尊感情といわれるものはここに含まれるように感じますが、いかがでしょうか。



こうして、「知・情・意」が、脳システム論の中でなんとなく収まるように感じますが、いかがでしょうか。

